

## 同志社科目から始まった 自校史教育

本日は私と、後にご紹介します4人の先生方が始めた新しい試み「良心学」の中で、我々の目指すもの、展望などを説明します。まず「良心学」ができた背景です。言うまでもありませんが、初期の同志社では新島襄が校長として、限られた学生と生活を共にしていました。日々の生活の中では特に理念などを語る必要はなく、新島の言葉を聞き、背中を見ながら、学生たちはその精神を体得していきました。しかし同志社が徐々に大きくなっていく中で、新島の考えや同志社の目指すところが見えにくくなってきます。同志社で4年あるいはそれ以上学びながら、新島襄について知らず、建学の理念の中身もほとんど知らずに卒業していく方が非常に多い。このような背景から私も設置委員会に加わり、2005年に「同志社科目」を作りました。

私は2005年以降、「建学の精神とキリスト教」などの講義を担当してきました。初回の授業では学生たちにクイズを出します。「同志社はいつできました

## レクチャー

良心教育に関するシンポジウム 基調講演

# 良心学とは

同志社大学神学部教授

小原 克博



か？」と質問すると、学内校出身の学生は別として、「1875」という数字を答える学生は、まずいません。「同志社はプロテスタントか、カトリックか」という質問も毎回します。10人中6人くらいが「カトリック」と答える。これはかなり危ないと思いつつ、やはり同志社科目を設置して良かったと思う瞬間でもあります。ある程度まとまった形で学ばなければ、同志社に4年間いたとしても意外と何も入ってこない。そこに同志社科目を学ぶ意味があります。

最新のデータによると、今年度、同志社科目の基本科目「建学の精神とキリスト教」は全体で19クラス、総登録者数は約5000人。一つの科目としては、おそらく同志社の中で最大の履修登録者数です。同志社科目はこのような基本科目と応用科目などからなっていて、総登録者数は1万1700人。かなりの数字です。これはこれで、一定の成果があると評価していいでしょう。同志社科目はいわゆる自校史教育の先駆けとも言えます。この後、京都の大学や全国の大学が自校史を教え始めました。

## 「同志社科目」と 「良心学」の違い

このような同志社科目があるのに「良心学」がなぜ必要になったのか。いくつか同志社科目と違う特徴があります。1つ目は、対象とする時代が違う。同志社科目は専ら新島襄の生涯、初期同志社の歴史に焦点を当てますので、広く言えば歴史学の一部です。しかし良心学は歴史学ではなく、同志社の良心を現代においてどのように適用していくのが主題です。現代の私たちがどうするのかに重点を置く。それなら大学以外の諸学校でも課題として広く共有できるのでと期待していますし、現代という視点から伝統的な教育理念を再検討する課題も副次的に見えてくる場合があります。

2つ目は対象者の違いです。良心教育あるいは、それに基づいた同志社科目は、同志社の在校生向けに展開されてきました。しかし良心学は、将来的には学生だけでなく、もっと広く展開していきたい。同志社関係者がコアになることは間違いありませんが、そこに限定されず、グローバルかつローカルな応用の可能性を探

り、問題提起をしていく視野を持ち続けます。同志社の教育理念が、同志社関係者を単に育てるだけでなく、その枠を超えて世界にどう貢献できるのかを積極的

に問うていきたいのです。3つ目は多様な視点です。私は神学と宗教学を専門として、その視点から良心の今日的なあり方を問うてきました。村田先生は、ご専門の国際政治における良心という問題を問いかけてください。木原先生は社会福祉がご専門です。まさに良心を実践的に展開する、非常に大事な部分です。そしてグローバル・スタディーズ研究科の内藤先生、位田先生には、それぞれ現代イスラム研究と国際生命倫理の立場から、良心との接点を探るような議論をしていただきました。

### 内外からの視点で 「良心」を追究する

村田先生、内藤先生と私の3人で複合領域科目を担当していた2013年の夏頃、村田先生から「良心学をしませんか」と声をかけられたのが始まりでした。「本気ですか？」と何度もしつこく尋ねました。いったん「良心学」というテーマで

科目を設置すると、簡単には看板を下ろせません。重みがあります。それでも「本気だ」と言われた。最低でも1年くらい準備期間がいると言うと、村田先生は「走りながら考えましょう」とおっしゃった。そして他の先生方に声をおかけした。この方々と一緒なら、走りながらでも何かできるのではと思ったからです。

位田先生と内藤先生は同志社に來られて間もない方です。お二人からは「私たちがこんな科目を担当していいんですか」と言われました。私は「先生方のように同志社のことを知らないからこそ、加わってくださることに意味があるんです」とお答えした。外部からの視点でも良心の可能性を語れるのです。結果的には各先生方が非常に工夫してくださり、良心学という新科目が非常に大きな可能性を持っていることを感じました。

良心学の講義は来年度も続けていく予定です。来年度在外研究に行かれる内藤先生の代わりには、経済学部の和田喜彦先生に加わっていただきます。和田先生は環境経済学がご専門です。まさに現代、環境問題において人類が良心をいかに発揮していくかが大きく問われている分野

です。ここにいるのはスターティングメンバーですが、この輪をどんどん広げていき、さらに新しいユニットができるといい。最初のチームがA K B 48だとしたら、次のチームはN M B 48や乃木坂46でもいい。そうして「良心」がどんどん拡散していけば素晴らしいことです。

### 3つの教育理念が固まるまで

そもそも同志社の教育理念はどこにルーツがあるのでしょうか。3つの理念は普遍のもののように受け止められているかもしれませんが、結論を先に言うと、決して同志社に最初からあった訳ではありません。むしろ戦後になってようやく形ができてきたものです。最近、150周年を目指して「同志社大学ビジョン2025検討委員会」が発足し、同志社教職員に第1回意見募集が行われました。そこにこういふ言葉があった。「教育理

念に加えるべき要素はないか、また教育理念の表記や表記の変更、補記は必要ないか、ご意見をお聞かせください」。凄く大事なことです。なぜか。こういう問いが無ければ、3つの理念は変えてはいけないものだと思います。しか

しこれは、変えてもいいものなんです。「キリスト教主義」「自由主義」という言葉は新島襄に起源があることは、はっきりしています。しかし「国際主義」という言葉を新島自身は使っていません。これは海老名弾正第8代総長が新島の教育理念として強調したものが受け継がれ、ルーツはおそらく湯浅八郎に求めることができます。総長を2期務めた人です。1947年から2期目の12代目総長を務めた時、湯浅は次の4つの言葉を強調して残しています。「新島先生」「キリスト教主義」「国際主義」「民主主義」。おそらくこれがルーツです。

百年史から引用すると、湯浅総長は「同志社大学は三流大学」と公言して憚らなかつた。しかしこうも言われました。「この四資源があるお蔭で、同志社は輝かしい歴史と伝統を受け継いで、世界に貢献できる教育機関たらしめることができ

る」。4つの柱が大事であると、彼は確信していたんですね。ところが「民主主義」は理念から脱落していません。47年という戦後すぐの日本において「民主主義」は非常に意味のあつた言葉だと思う。しかしこれを今も同

志社がずっと受け継いでいて理念の一つに入れていると、ちょっと変な感じがしますね。ですから、おそらく歴史の篩(ふる)る(い)にかけられて落とされていった。そして「新島先生」も、言わずがなだから外れた。そしてこの後に「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」が少しずつ整理されていき、同志社の3つの柱とされていった。その時期を特定するのは難しいですが、今はそれが問題ではありませんが、戦後その3つができたことを考えれば、私たちが150周年という節目に、この3つの理念のあり方を根本的に考え直すことは全然間違いではないのです。

### 新島に見る「体験的良心」

良心とは、良心教育とは何かと言うとき、良心という言葉だけに集中して議論してもあまり実りはありません。むしろ関連するいろんな理念を学びつつ、それを吸収する必要があります。知徳並行教育は新島が強く求めたものですし、自由の愛好者としての新島の姿も大事です。「人ひとり」を非常に大切にしている新島の姿勢や、新島独自の地方教育論もありま



す。前者2つは比較的よく知られてい  
ますので、後者2つを簡単に紹介しま  
す。「人ひとり」は1885(明治18)年、

同志社創立10周年記念式で新島が語った

言葉です。やつと10年経ったお祝いの席  
なのに、こんな場違いな発言が記録に残  
っています。「諸君と共に過去を追想し  
て祈念したいのは、昨年私が渡米で不在  
中に同志社を退学させられた人々のこと  
である。本当に彼らのために涙を流さず  
にはいられない。彼らは真の道を聞き、  
真の学問をしていた人々であったが、退  
学させられることになった。諸君よ、人  
ひとりは大切である。一人は大切である。  
過去は既に過ぎたことなのでどうしよ  
うもない。しかし今後については、私たち  
は誠に用心深くありたいものである」。  
先生は涙を流し胸を詰まらせながら述  
べられたので、満場一人として涙ぐまない  
者は無かった。これが同志社にとって  
非常に大事なエピソードとして語り継が  
れているんですね。同志社がいかに大き  
くなったとしても、機械的に流れてはい  
けない。一人を大切にすることがどう実  
現されるのかは、当然私たちにとっての  
課題です。

地方教育論は1882年に新島が講演  
で述べたものです。「教育に付いて論ず  
るに何の差別もあるまじきに、何故地方  
教育論を為すかと問えば、答えて曰わん

### 「良心」の再解釈と 「個儻不羈」の精神の再醸成

農夫の2ドルの物語です。新島は日本に  
キリスト教主義学校を設立するためにラ  
ットランドのグレイス教会で演説を行  
いたくさんの募金をいただいた。しかし集  
会后、一人の農夫から「帰りの電車賃だ  
けど使ってください」と2ドルを手渡さ  
れる。これが同志社の礎の一つになっ  
ているのだと、彼はずっと語り続けます。  
これを通じて彼は良心がどういうものか  
を体験していく。だから彼にとつての良  
心とは、抽象概念や狭い意味でのもの  
ではありません。「体験的良心」と言い換  
えても良いでしょう。

先ほど、いろんな大学が自校史教育を  
始めたと言いました。同志社ほど、こ  
ういったエピソードをふんだんに持つて  
いる学校はありません。同志社にとつて最  
大のアドバンテージだと言つて良いでし  
ょう。概念的なものより、物語、ナラテ  
ィブ、エピソードがたくさんある中から  
私たちは良心のあり方を学んでいきます。  
特に新島に関するエピソードは極めて冒  
険的です。脱国やアメリカでの学びもそ  
うですが、冒険的なエピソードは私たち  
を今も勇気づけ、エネルギーの源になり  
得るのです。

同志社創立150周年に向けて、この  
新しい良心学がどういう方向を打ち出  
しているのか。私は3つの教育理念を再  
解釈、再定義していく作業が必要だと考  
えます。私なりのアイデアを紹介します。  
「キリスト教主義」は確かに同志社が  
掲げているものです。法人諸学校には聖  
書の授業があります。しかし授業で教え  
たから「キリスト教主義をやっています」  
で良いのか。あるいは教職員の立場で言  
うと、新しく同志社のコミュニティに入  
ってきた人は改めてキリスト教を勉強し  
ないといけないのか。今さら聖書を読む  
のもしんどいというのが現実でしょう。  
では、どうすればいいのか。聖書に「善  
きサマリヤ人」のたとえ話があります。  
イエスが、ある宗教の専門家から「隣人  
とは誰か」と聞かれた。イエスは善きサ  
マリヤ人のたとえをした。ある人が追  
はぎに襲われて傷ついている。通りかか  
った2人は見過ごしていくが、最後に来  
たサマリヤ人は介抱して助ける。隣人に  
なったのは誰か。「それは助けた人です」

我国の教育の如きは東京、中央に集まり、  
何学も中央に行かねば学問のなき事に成  
行き、又中央の地に於て受ける所の悪風  
は、生徒を腐敗せしむるに□(※欠損)  
し。これを薫陶し、これを養生するに、  
勢力の乏しき事あれば、今日の勢いを以  
て論ずれば真正の教育を地方に布くに如  
かず。中央集権的な教育政策ではなく、  
地方にこそ教育を行き渡らせていく。  
我々にとつても大きな問いになっていま  
す。

新島が私たちに語り伝える良心という  
ものは、彼がアメリカでconscienceとし  
て出合い、体験していったものです。英  
語のconscienceは、conと、scienceとい  
うラテン語から来ていますし、さらに言え  
ばギリシア語に遡ります。「共に知る」  
という意味を持ちます。私たちは良心と  
いうと、自分の内なる声を聞きますね。  
内なる声と対話し、共に行くべき方向を  
知ろうとする。内なる対話としての側面  
と、私と他者と「共に知る」という側面  
の、二重の次元があると思います。

ただ新島が語ろうとする良心は理念的  
なものではありません。彼はアメリカで、  
まさに良心を体験します。有名な一例は

と答えた相手に、「では、行つてあなた  
も同じようにしなさい」とイエスは答  
えています。こういう行動的なキリスト教  
主義を果たして我々はできているのかを、  
厳しく問うていく必要がある。「行つて  
あなたも同じようにしなさい」に応える  
ような人物を輩出しているかどうか。  
我々はイエスのこの問いに応えること  
によって、キリスト教主義の内実を問  
う必要があると思います。

「自由主義」については、新島が自由  
の愛好家であったことから大事にされて  
きました。今の時代は極めて自由です。  
自由すぎるくらいに自由です。インタ  
ネットなどではいろんな情報も自由に得  
られます。しかしそれは、システムの枠  
の中だけの自由かもしれません。私たち  
は本当に自立、独立した人間なのか。  
この時代の中で「個儻不羈なる書生を  
束せず」という新島の遺言を、私たち  
もつと強調していいと思います。今の学  
生の中に、「個儻不羈なる書生」はどれ  
くらいいるのでしょうか。

では、どうすればいいのか。新島は周  
囲にとつてのロールモデルでした。あれ  
だけ無茶苦茶やつてもいいんだという

ことを周りの人は感じた。同じように、  
個儻不羈なる書生を育てていく教育環境、  
精神を、むしろ教職員の中に充満させて  
いく必要があるのではないかと思えます。  
「国際主義」については、現代はグロ  
ーバル人材という言葉をよく聞きますね。  
しかし世の中が求めるグローバル人材を  
追求し、文科省からほめられて「国際主  
義を実現しています」と言うだけではだ  
めです。なぜか。国の求めるグローバル  
人材の育成は、勝てる国になるための「勝  
ち組」の養成です。富める者がより富め  
るように、つまり「幸福の最大化」に関  
心がある。しかし私たちがむしろ求める  
べきことを新島の理念に従って言うなら  
ば、「不幸をいかに最小化するか」とい  
う視点です。これは社会福祉の領域だ  
と思えますが、自分が勝ち組になって良い  
人生を過ごすだけではなく、本当に世か  
ら関心を向けられないような人たちに對  
して関心を向け、助けに行くことのでき  
る人材を同志社がもし輩出できるならば、  
これは大きな意義があると思えます。

### 伝統に安住せずに 自己改革の推進を

長い歴史を持つ組織は、いずれも歴史  
の中で大きな自己変革を経験して時代を  
継いできています。しかし今は非常に変  
化のスピードが速い。十年は昔の百年に  
匹敵するくらいです。同志社は150周年  
を迎えようとしています。ひと昔前の  
感覚なら1500年くらいに相当するく  
らいの変化を、私たちは150年間に経  
験しました。キリスト教の歴史は200  
0年あります。1500年後に何が起こ  
ったか。16世紀、宗教改革です。これに  
よって、ほぼ腐りかけていたようなキリ  
スト教が、内部から自らを食い破って新  
しい芽、新しい流れを生み出していった  
ですから今の同志社にとっても  
Reformationは必要です。150周年は  
キリスト教1500年の節目に対応して  
いると言ってもいいくらいです。

では、このReformationは何にプロテ  
ストするのか。時代や国の政策には迎合  
しない。鑄型にはめられるのではなく、  
時代精神にしっかりと抵抗しながら  
Reformationしていく。そういう意味で

プロテストする姿勢が大事です。しかし  
何より大事なものは、私たち自身が伝統に  
安住しようとする姿勢にプロテストする  
ことです。「キリスト教主義、自由主義  
国際主義。これでいいじゃないか」――  
この安住の姿勢にこそ、私たちはプロテ  
ストしていかないといけない。もつとも  
つと個儻不羈の精神で伝統を見直してい  
く中で、大胆な一歩を踏み出すための踏  
み台、発射台に、この良心学がなればと  
思います。原点を大事にしつつ、学際的  
な問題提起を行い、良心のネットワーク  
をローカルかつグローバルに構築してい  
く土台として良心学を展開していれば  
と思いますし、その担い手には、ここに  
いる皆さん一人ひとりがなれると思いま  
す。そうすることによって新島の志を継  
ぎ、社会や世界に貢献できる機会を作っ  
ていきたいと願っています。

### 良心の醸成に必要な マイノリティの視点

小原●先ほど良心学の概要についてお話  
しました。パネルディスカッションで  
は、その学際性がいかに展開されたのか  
を、それぞれの先生からご説明いただき  
ます。私たちが何度も「良心学」につ  
いてディスカッションする中で問題になっ  
たのは、そもそも良心とは何なのかとい  
う定義づけの問題でした。例えば個人が  
良心的に生きることはできると思いま  
す。しかし、社会や国家のレベルで「良心」  
はどう機能するのかなどについてかなり  
議論を行い、良心の定義づけは難しいと  
いうことが一つの合意になりました。

私はこのような話をしていると思いま  
す、一つの言葉があります。アルベルト・  
シュヴァイツァーという、ノーベル平和  
賞を受賞した神学者、医者です。彼があ  
る著作の中で「やましきでない良心は悪  
魔の発明である」と言っています。「や  
ましき」は「葛藤」という意味です。葛  
藤する中にごそ良心の意味があるとい  
うことだと思います。私たちが春学期にそ

### レクチャー

## 良心教育に関するシンポジウム パネルディスカッション 「良心学」が目指す地平

パネリスト

村田晃嗣	大学長・大学法学部教授
木原活信	大学社会学部教授
内藤正典	大学グローバル・スタディーズ研究科長・教授
位田隆一	大学グローバル・スタディーズ研究科特別客員教授
コーディネーター 小原克博	大学神学部教授

コーディネーター



小原克博  
大学神学部教授

ういう経験をしました。今日は各先生方  
に、良心学の授業を担当していただいた  
中で、どのような講義をされたのか、良  
心との接点をどのように意識されたのか  
をお話しいただきましよう。

村田●私は2回お話しました。1回は  
自分の専門に引きつけて国際政治の話  
をしました。今、小原先生から「国家の良  
心はあるのか」という問いかけがありま  
したが、吉田茂は「外交は商売と似てい  
る」と言った。外交も商売も最終的には  
信用が命である。国と国との関係でも、  
奇策を取って利益を上げたり国力を拡大  
したりすることはできても、信用を損な  
う国とは長期的にうまく行かない。良心  
というのかどうかは別だけど、そういう  
行動規範みたいなものは国レベルである  
だろうと思います。



村田晃嗣  
大学長・大学法学部教授

私は授業の中で、学生に考えてもらう材料として『未知への飛行』という映画の話をしました。『十二人の怒れる男』などを作ったシドニー・ルメットという監督の、1964年の作品です。アメリカの将軍が精神に異常をきたし、戦略爆撃機に命令してソ連に核攻撃命令を出してしまう。もう誰も止めることはできない。いよいよモスクワが攻撃されそうになると、ヘンリー・フォンダ演じるアメリカ大統領がソ連の書記長に電話をして縷々説明する。「これは悪意ではない、まったくのアクシデントからこうなっているのだ。アメリカがソ連を攻撃する意図はない」。書記長は「それは個人としては分かるが、モスクワが破壊されれば我々は反撃しない訳にはいかない」と言う。そうなる全面核戦争になってしまう。

する気持ち、他者と自分との違いを前提としながら、他者を理解しようとする気持ち。これは究極的に自分の救いにつながるのだという考えも、良心を考えると大きな前提になるのではないだろうか。

### 「社会の良心」とは

木原 ●同志社大学社会学部の木原です。社会学部が専門です。私の行った授業は3回です。1回目は、私が若い頃に研究していたアメリカの「ソーシャルワーカーの母」、ジェーン・アダムズを取り上げ、なぜ彼女が、社会学部にコミットしたのかをお話ししました。その動機には、社会的な「良心」というものが介在していました。2回目は同志社がなぜ「社会学部の同志社」と呼ばれるのかを考え



木原活信  
大学社会学部教授

います。アメリカ大統領がまさに葛藤の中で下した苦渋の決断は、自ら命令してニューヨークを破壊することでした。モスクワとニューヨークを共に破壊することでご破算にして、全面戦争を避ける。何百万人は死ぬかもしれないが、人類が滅亡するよりはマシである。これは国際政治における究極のリーダーの判断ですが、何百万人が死んでいくときに、個人の良心、葛藤は大変なものでしょう。極端な例ですが、そういうことも考えてもらいたいという話をしました。

私は学長になって一年半以上経ちますが、なつてよかつたと思うことが時々あります。2つだけ申しあげますと、1つは2014年6月にアーモスト大学を訪問する機会があったことです。アーモストのジョンソン・チャペルには歴代の学長や卒業生の肖像画が掲げられています。新島の肖像画はこの何十年、おそらく百年以上、引き続き正面右の一番名譽ある位置に置かれています。アーモストはノーベル賞学者を4人出し、大統領や世界銀行総裁も出しているが、アーモスト大学の説明では、この知的コミュニティに対してどれだけ大きな精神的インパクト

ながら、新島襄の福祉思想の系譜を紹介しました。具体的には、卒業生ではないが新島を慕い、新島に学んだ石井十次という人物を取り上げ、「社会の良心」として活躍した点についてお話をしました。3回目は現在の貧困、自死、無縁社会などの問題について、「良心」という問いに対して私たちはどう応えることができるのかについて話しました。

「社会の良心」という点では、一つのキーワードとして「compassion」を伝えました。日本語にすると、「共感・共苦」となります。これは「passion」（苦しみ、苦難）を共にする（com）ことです。社会で苦しむ人と共に痛み苦しむこと自体が、それこそ「良心」というものが密接にかかわり、社会を動かす重要なファクターになっているのではないかと。ジェーン・アダムズ、石井十次、あるいは同志社を出て社会事業に関わった多くの人たちの精神は、「善きサマリア人の良心」という言葉でも置き換えられると思います。彼らは共通して、良心を起爆剤、つまり行動を起こすモチベーションにしました。

ところで、サマリア人は当時のユダヤ

を与えたかによって卒業生を評価している。19世紀末に命を懸けて海を渡り、この大学でキリスト教を修め、西洋の文化を学んだ新島は、最も偉大な卒業生だと評価してくれている。19世紀末に新島がアーモストに行ったのは南北戦争直後です。おそらくアーモストに黒人学生はまだいない。新島は白人の中で完全なマイノリティだった。そしてもう一度日本に帰り、京都でキリスト教の学校を作ろうとした時も、完全なマイノリティだった。マイノリティの視点がどれだけ活かされるかということは、自らを振り返る、自らを疑うという意味でも、良心を構成するときに大変大事ではないかと、新島の経験から改めて思います。

もう1つは初めて国際基督教大学（ICU）をお訪ねする機会を得たことです。戦前戦後に同志社総長を2度務めた湯浅八郎は、ICUの初代学長でもありました。これは、ICUで今も大変尊敬されている湯浅先生の有名な言葉です。「生きることは愛すること／愛することは理解すること／理解することは赦すこと／赦すことは赦されること／赦されることは救われること」。他者を理解しようと

社会から非常に嫌われたマイノリティだったんですね。「サマリア人の良心」を考えると、これは重要です。例えば社会事業に大きくコミットしたのは、英国国教会から迫害されたクエーカーの人たちでした。ウェスレーのメソジストもそうでしょうし、救世軍やジョージ・ミューラーもそうです。皆、共通しているのは、主流派ではなく、少数派として迫害をされたような人物です。その人たちは迫害ゆえに痛みを最も感じましたが、逆に、苦しむ人を身近に感じ、その人に手を差し伸べ、19世紀に本当に大きな貢献をしました。

村田先生がおっしゃったように、新島もアメリカではマイノリティでした。仏教界の京都でもそうでした。その中で彼は「良心」という言葉を取り上げました。一方で会衆派には、福祉にも大きな影響を与えた voluntarism という伝統あるいはエトスがあります。これは、今日のボランティア精神という意味合いよりは、むしろ、自主的あるいは独立した市民的運動という意味です。自発的に独立して権力（国家）と闘うというニュアンスもあります。そういったものを新島がどの

ように言葉で伝えたかどうかは別として、彼は自分の生き方を通して学生たちを鼓舞しました。それを受けて、例えば同志社では留岡幸助、山室軍平など、まさに個個不羈なる学生たちが、キリスト教とは社会の中で発信し、実践していかないといけないものなんだという強い確信をもって、社会へ出ていった。「同志社派の福祉」「良心派の福祉」という言われ方をします。故小倉襄二大学名誉教授は、同志社の社会福祉は「底辺へむかう志」を担っていると言いました。いま私たちが、本当にそういう形でこの志を受け継いで、担っているだろうか、自分自身の責任として考えています。

### 良心をイスラム世界の現状から考える

内藤●グローバル・スタディーズ研究所の内藤です。私はここへ来るまでは五十年、東京に居ました。同志社大学で唯一縁があったのは一神教学際研究センターです。一神教という視点からキリスト教だけでなくイスラムやユダヤ学について統合的な研究を行う、大変魅力的な場であると、東京時代から思っていました。

ません、絶対に不可能です。そうであるならば、我々は何のように対話の道を開くことができるのか。それを同志社の若い学生たちに理解してもらいたくて、2回イスラムの授業を行いました。

### 「科学技術の良心」を問う授業

位田●グローバル・スタディーズ研究所の位田です。私が一番同志社に来てからの年数が少なく、まだ2年半です。もともと国際法が専門です。最初私は「国際法から見た良心」というテーマを考えましたが、このメンバーは基本的に文科系の先生なんです。先ほどの小原先生の講演では、「現代において良心をどう考えるか」が重要だというお話でした。そうならば、文科系のテーマだけでなく、現代に欠くことのできない問題である

グローバル・スタディーズ研究所で、私は新たに新島の精神を勉強しました。その上で新島の精神を現代に生かすために、特に「国際主義」の面では何ができるのかを念頭に置いて4年間、教員を務めてきました。

その一つがイスラムに関することです。授業で話したのもイスラムという宗教に関する良心でした。世界のイスラム教徒は、推計ですが15億とも16億とも言われます。但し現在報道されるイスラムの内容は極めて暴力的な話がほとんどで、普段のイスラム教徒が何を考えて生きているのかは報道されません。特に今年になってからは「イスラム国」が台頭して、大変野蛮な行為をしている。そういう時に、では彼らの主張にはまったく耳を傾ける要素はないのかを、取って問おうとしました。

もちろん彼らのテロ行為、少数民族、少数宗派に対する蛮行は、私は一切支持しません。しかし学生にも話しましたが、彼らの主張の中にこういうものがあります。「我々がアメリカ人を殺害すると無辜の市民を殺したと世界中が非難する、では、アフガニスタンやイラクでアメ

「科学技術」の良心を抜きにしては、現代における良心は語れないのではないかと。特に同志社には現在、最先端の医学生命科学系の学部があります。私は18年前からしばらくユネスコの国際生命倫理委員会の委員長を務めましたので、最近では生命倫理を扱うことが中心になりました。生命倫理とは確かに「倫理とは何か」という問題の一部ですが、私はこれまで医学や生命科学の研究やその成果の応用の基準についての議論をしてきました。

科学技術は、基本的には人類にいろいろな恩恵を与えてくれます。しかし時に取り返しのつかない、非常に大きなマイナスを与える可能性があります。先ほどの映画のようなことが起きる可能性もあるし、日本は原爆を経験しています。核と原子力は同じものですが、平和利用するときには原子力、兵器として使うときは核兵器と呼ぶ。原子力発電は非常にクリーンでたくさん電力を作れるけれど、福島原発事故があり、膨大な被害を生んだ。科学技術のプラスとマイナスは、常に考えていないといけません。

科学者がよくおっしゃるのは、我々は常に新しいことを発見、発明しようと思



内藤正典  
大学グローバル・スタディーズ研究所長・教授

リカの誤爆によって死んでしまった人たちをアメリカは何と呼んでいるか。『Collateral Damage』と呼んでいるのだ」と。Collateral Damage は付随する被害、やむを得ない被害という意味です。

そこで私の頭にあるのは、新島の「人ひとりは大切なり」です。世界中の人の命の間に軽重があるはずもない。確かにイスラム国はテロ組織ですが、先ほどの問いに、世界は向き合わなければならぬ。結局そのことを放置したまま、この数十年、いや半世紀にわたり、植民地支配を含めれば2世紀にわたって彼らは抑圧を受けてきた。したがってイスラム国というものは、決してあれが始まりではない。長い歴史の上に最後に出てきてしまった、怪物のような存在なのです。それを武力で潰すことができるのか。でき

っている。マイナスの出来事が起きた場合は、新しいもの自体ではなく、それを使う人が悪いのだと。果たしてそうでしょうか。何らかの危険があると分かっている、その危険を理解して科学技術を進めていくのが本来の科学者でしょう。そこで、科学技術者の良心も問題にする必要があります。出来上がった科学技術を使う側も、使い方を自分に問い直さないといけない。これは使う側の良心です。それに科学技術政策は国の良心に関わるものです。したがって科学技術については、科学者の良心、利用する者の良心、国の良心という3段階で考える必要があります。

今の私は生命倫理が専門ですので、授業では生命科学を例にしてお話をしました。例えば出生前診断を受けて中絶する人がいる。本当にそういうふうに使っていいのだろうか。中絶を全くしてはいけないという問題は現代の科学技術を前にして考え直す必要があるのではないかと。学生の最後のレポートのテーマは「科学技術を前にして人間の良心とは何か」でした。いろんなことを書いてくれて、私自



位田隆一

大学グローバル・スタディーズ研究所  
特別客員教授



身は非常に勉強になりました。

### 内面と向き合うことの重要性

小原 ● 4人の先生方のお話には、それぞれ良心との接点がありました。村田先生はマイノリティの視点。木原先生も触れてくださった。これは全体をつなぐ一つのキーワードになると思います。内藤先生は国際主義という形で貢献したいとお話くださいました。おそらく今後、同志社が求めるべき国際主義の中ではマイノリティの視点をもっと明確にしていっていいと思います。村田先生が紹介くださった湯浅八郎の言葉には、一人の人間に寄り添う優しさみたいなものがにじんでいます。湯浅が新島から受けたものの中には、ICUにおいて花開いたものが結構あります。私はICUで講義をすることもあるのですが、学生が非常によく教育されている。優秀です。ICUはリベラルアーツに本気で取り組んできました。今後何か、同志社とつながりができるといいなという思いもします。内藤先生がイスラムのお話をしてくださいました。同志社の中心はキリスト教主義ですが、しかし今日、キリスト教とイスラムを

別々に勉強するようでは、世界の現実は見えません。これをどう関係つけて学べるのか、知ることができるのか、そして私たちに何ができるのかは、私も関わっている一神教学研究センターで研究が続いているところです。

先生方の今のお話に通ずるのは、良心がどのような場において激しく揺さぶられるのか、そういう場に学生を、おそらく連れていく必要があるということですね。良心を震わせる場としては、どういものが考えられるでしょうか。

木原 ● 先ほど小原先生が「やましさのない良心は悪魔の発明」という言葉を言われ、ドキッとさせられました。同志社の社会福祉学の創設に関わられた嶋田啓一郎先生のご自宅に伺った時、先生の言葉に印象に残ったことがありました。キリスト者として社会福祉にどのように積極的にかかわるのかという私の力んだ話に対するお言葉だったと思います。が、「本当の社会福祉というものは『愛せない』ということから始まるものだ」と私は思いますよ」とおっしゃったのです。私は当然「愛すること」から始まるのだと思っていました。頭を叩かれた思いがしました。

考えてみたら、先ほどのシユバイツァーの言葉と同じなのかなと思います。「私は世界の人を愛しています」なんていう言葉を仮に言ったとしても、それは、具体性に乏しく非常に空虚な気がします。「本当の意味で人と関わり、人を愛せるんだらうか」というのが、嶋田先生の言葉「これは始まる」という嶋田先生の言葉は、いまだに私の中にズシンと響いています。最近あるキリスト教系の雑誌に「愛せないことから始まる社会福祉」というコラムを書いたところ、予想を越えて凄いい反響があり、多方面から共感のメールをいただきました。真摯に福祉と向き合っている方々からでした。その意味において良心学の授業では、決して表面的なきれいな事では無い本音の部分で、愛するということについて考えていきたいと思っています。

村田 ● 先ほど私の紹介した映画の原題は『FAIL SAFE』です。機械が誤作動したときに働く安全装置のことです。どんなに精緻に作ったものであっても誤作動することをお前提として、Fail Safe という概念がある。conscience も con science ですから、反証可能性があるということ。

どんなに完璧でも間違っている可能性があり、それを証明する可能性が無ければそれは思い込みになってしまう。誤りを犯さないことが良心なのではなく、誤りを犯す可能性に気づき、気づいたとき修正をかけられるような試みみたいなものが良心なのではないかという気がします。

マイノリティの視点が大事であるというお話も出ました。これもマイノリティとマジョリティをあまり二分論的に考えない方がいい。マジョリティが強いから悪なのではなく、マジョリティが正しいこともあるし、少数派で弱いものが悪であることもある。二分論に陥ってしまうのは危険です。

教育の場で言うと、各学部で先生にお願いして「同志社100冊」を選定しました。欧米では Great books という考え方があり、古典を読むことが推奨されます。「同志社100冊」選定の動機は古典回帰というよりも、学生に貴重な時間と空間を与えるためなんです。

学生は社会に出たら、否応なく勝ち負けや利害得失の世界で生きていきます。けれど大学での4年間は勝ち負け関係なしに人生を考え、歴史を振り返ってほし

い。リチャード・ローティというアメリカの有名な哲学者が「大学の使命は何かに熱中する人たちに逃避の場を提供することだ」と述べています。社会に開かれた大学は確かに必要ですが、同時に学生たちを社会から遮断し、かばい続ける大学でもありたい。そのとき古典を読むと、そこには静けさがある。百年前、千年前にも人間がもがいていた悩みがある。それと向き合ってみたら、自分の今の恋愛や就職の悩みがどんなに小さな悩みかに気づく。自分が凡庸で小さな人間だと気づく。同じような悩みを、あんな偉い人が抱えていたことが分かるということ、静ひつな読書の時間と空間を与えることは、良心を考える上でも大学教育が果たす重要な役割ではないかと思えます。

小原 ● 内面に向かうという、まさに良心の大事な部分ですね。

### 「後になる人が先になる」ような良心を探る

内藤 ● 2012年にグローバル・スタディーズ研究科では、リーディングプログラムが採択されました。書面審査が通ってヒアリングに行った時、このプログラ

ムでどういうグローバルリーダーを養成するつもりかと審査員に聞かれました。私はそういうのが嫌いなので、「人を支配したり、ビル・ゲイツのように大金持ちになるような人材を育てるつもりはありません。強いていえばマザー・テレサのような人」と言ったら、後で神学部長に「彼女はカトリックです」と言われましたが（笑）。

私が同志社へ来てから学んだこの大学の精神は、人の上に立って人の首を掴んで振り回すような人材を育てることではない。逆に、現在非常に困難な状況にある人たちの中に入り、その問題の緩和なり解決なりのために新しい知恵を作り出していく人材を大学院として養成したいと言いましたら、採択された。他の大学はよほど訳の分からないことを言ったらしく、その時は有力国立大学も落ちました。後で聞くと、我々が評価された点の一つは「建学の理念がある」ことだったそうです。大事なことです。国立大学にこそ、建学の理念というものはありません。それを同志社は持っている強み、しかもそれが良心と結びついている強み。これをグローバルに展開していく

のは、同志社大学の今後にとって非常に重要であると痛感しています。

**位田** ●良心学とは、良心とはこんなものだということを教える科目ではないんですね。みんなで考えてもらおう科目です。良心とは何かという問いに正解はありません。しかも何が誤りで何が誤りでないかということも、はっきりしない。私は生命倫理の立場で学生に質問をよくします。例えば不妊治療、いわゆる生殖補助医療ですが、人工授精、体外受精、最近では代理母まである。さらに60代の方から子宮を摘出し、子宮の無い30代の女性に移植して、体外受精をして受精卵をその子宮に入れて子どもが生まれたこともありました。

どうしても子どもが欲しい人たちがいます。それこそクローン人間でいいから子どもが欲しいという人もいます。だけど、それで本当にいいんでしょうか。それでも欲しいからいいんだと言う人もいます。間違いいではない。それはいけないと言っている人もいます。それも間違いだとは言えませんが。あなた方はどう考えますかと学生に聞くと、やはり賛成、反対がいます。講義で「科学技術の中で人間の良心とは何

ですか」と聞いた時、皆それぞれ自分の答えを持ちながら、自分にもう一度「科学技術とは何だろう」と問い直す。答えは出ないかもしれない。もしくは悩む。その悩むプロセスが良心につながる。そういう授業をさせていたのだつもりです。

**小原** ●今回、位田先生がたまたま生命倫理分野にお話しだったので科学技術についてお話しいただきました。本来「良心学」は学際科目としてやりたいという村田先生の意向の中で、理系の人にもぜひ入って欲しいという計画がありました。今年度は時間の関係で間に合いませんでしたが、今後はそういうフォーメーションを整えていければと考えています。

「良心学」の講義をお聴きになりたい方は、どうぞインターネットで動画をごらんください。今回、初めての試みであるにもかかわらず動画配信を行った理由は、先ほどの新島の地方教育論とも関係します。教室に来ている学生だけでなく、教職員、あるいは遠くに住んでいても同志社に関心を寄せてくださる多くの方に聴きいただきたいのです。本日はありがとうございました。